

Series

私の漢方診療日誌

No.128 あの人は今…人生に秋風を感じる頃 加味逍遙散の慰め

秋風が吹く季節になると、楽しかった夏の思い出がふと胸をよぎります。一年という月日の単位でもそうですが、人の一生と言う長いスパンで考えても、若い頃の自分が輝いていた人程、人生の盛りを過ぎた時の憂いが大きいようです。今回は、そうした寂しい人に役立つ処方話です。

Yさんは、39歳の主婦で、私が小児科でしばしば診察している兄弟のお母さんです。ある時、めずらしくお父さんが子供を小児科に連れてきて、帰り際に「うちのかあちゃん（奥さん）が泣いてばかりいて、何も手につかないから、先生、何とか言ってやってくれないか。」と言うのです。普段の元気でおしゃれなお母さんの姿からは考えられない、思いがけない相談でした。半信半疑のまま、後日、お母さんだけ病院へきてもらおうと、診察室の入り口から、ぼろぼろ涙を流しています。開口一番、「もし、重い病気だったらどうしよう」と泣き崩れてしまいました。何とかなだめながら聞き取れた話では、「祖母の介護で疲れている。手首の痛み、腫脹があり、内科へ行ったら、リウマチかもしれないと言われた。それから、何もやる気力がなくなり、泣いてばかりいる。夜も眠れない。」ということでした。診察では、臍上悸が著明にあり、腹直筋が板状に硬くなっていました。とにかく、眠れるようにするために、抑肝散加陳皮半夏（TJ-83 ヨクカンサンチンピハンゲ）を1包ずつ、朝晩2回処方しました。一週間後、診察すると、内服して一日で、感情失禁は無くなり、日常の家事ができるようになったそうです。しかし、嘔気があり、水滞が残っていると思われました。また、お臍の周囲も圧痛があり、瘀血が疑われました。そこで、加味逍遙散（TJ-24 カミショウヨウサン）を一回1包ずつ、一日二回に変更しました。すると、飲み始めた翌日から気分が嘘のように楽になり、あまりの変化に旦那さんが、「何の薬飲んだんだ？なんか変なモン飲んだんじゃないか。」と尋ねたそうです。夫の驚くさまをケラケラ笑いながら話す様子は、すっかり元の明るいお母さんに戻っていました。



加味逍遙散は、自律神経・内分泌などの機能失調により現れた諸症状、とくに婦人の精神神経症状を伴う諸症に用いられることが多い処方です。石毛敦先生は、卵巣を摘出し、かつストレスを負荷することで睡眠時間を短縮させる、あるいはパニック行動が悪化する動物モデルに加味逍遙散を与え、ストレスからくる症状を改善させるデータを示しています。つまり、卵巣機能が低下し、ストレスに弱くなった女性の臨床的にみられる精神神経症状の改善に加味逍遙散が有用であることが予測されます。

私は、こうした女性を「あの人は今・・・症候群」と密かに名付けています。典型的には、昔、美人で人気があった（と想像される）イケイケのお姉さんが、家庭に入って普通のおばさんとしての生活、あるいは老人介護の中に、ふとアンニュイ（倦怠感）を感じた時に現れる様々な不定愁訴を指します。重要な症状として、スカートなどに、自分の最盛期のファッションを微妙に残しているのが見て取れます。例えば、若い娘が着るようなタータンチェック、ミニのスカートとか、ワンレン、ボディコンなどの一世を風靡したファッションです。人生に秋風を感じる年齢になっても、輝いていた青春の栄光が忘れられないのでしょう。

もう一つ、加味逍遙散が効果を示す有名な症候があります。群馬の村松先生が名付けたという通称「コロボ症候群」です。これは、多彩な訴えと詳細な質問攻めにあった医者が、ようやく診察を終えカルテを書いているときに、不意打ちで診察室に戻り、一番大事な事を告げる患者で、多くは中年の女性です。その相手の油断を突くタイミングが、刑事コロボの「ひとつ忘れてました・・・」という決まり文句に極似しているのです。皆さ

んの診察室にも出沒しているのではありませんか。